

アメリカ的象徴への「変容」を今日端的に示すのが、民主党と共和党の双方が、その最も重要な政治キャンペーンにおいて彼の音楽をこだわりなく使用出来てしまう点であり、その他、そもそも彼の革新主義的で調和的な理念とはおよそ相容れない文脈で使用されるアメリカ海兵隊新兵募集における《市民のためのファンファーレ》なのであり、AT&T や GM といった何よりもスキャンダルを嫌う巨大老舗企業が、テレビ広告において彼の楽曲を使用するに至る点であろう。したがって、本論冒頭に挙げた「ケリー賛辞」を含め、今日的な視座からのコーブランドの資料を批判的に検討すること無しには、彼の 1930 年代から 40 年代の内実を知ることは困難と考える。

最後に、上のようなコーブランドの「変容」に関連してケリーの賛辞には着目すべき痕跡が認められることに触れておきたい。賛辞内にみる『ボストン・グローブ』紙からの引用部では、コーブランドの音楽が「ある曲はフランス的であり、あるものはラテン的であり、また、あるものはアメリカ的である」とある。ところが、その引用元の紙面をみると「フランス的であり」の後には本来「あるものはロシア的であり」(some Russian) の語句が続いている<sup>73</sup>。すなわち、この公文書作成にあたり何らかの経緯で、引用元にあった「ロシア」の語句が削除されている。その際、賛辞中の他の引用部で中略のある場合には、律儀に付されている「・・・」の記号が見られないことも示唆的である。むろん恣意的である可能性もあるが、一方で共和党政権下でこの賛辞が作成された時点〔1990 年 7 月〕において未だソヴィエト連邦自体は存在していたことや、50 年代の彼の〈ウォルドーフ会議〉等の経緯を思い出すならば、連邦議会が贈る賛辞としては、まずは余計な禍根を絶つとともに、以後のコーブランドの受容像にも配慮した結果と想像することも、あながち不可能ではないだろう。

### 1-3. われわれに求められる視座

本章の議論の範囲から引き出し得る結論は以下である。1930 年代から 40 年代のアメリカの藝術音楽においてコーブランドが果たした役割を探究するわれわれの視点は、1). その当時を生きるコーブランド、2). その作品、そして 3). 彼の藝術活動の土壌である当時のアメリカ社会の動向、この三者を同

時に見通す位置にこそ置かれるべきである。

とくに作品の考察については、コープランドの美的理念がエマソンやホイットマンらによって示された西欧からの「アメリカの知的独立」を求める〈アメリカン・ルネサンス〉の系譜にあるため、西欧近代的自律美学を基軸とするのではなくて、アメリカでその当時までに構築されていた文化的思潮に基づいてなされる必要がある。

また、冷戦期以前の上記三者を同時に見通す際に〈歴史修正主義〉論者の議論が示唆的である。コープランドや国安康雄にみる冷戦を境にした評価の変容からいえることは、藝術家の受容はその時点でのイデオロギーに影響されることである。ここからわれわれの研究的視座に関する留意点を挙げるならば、もし今日のコープランドの受容を基にして、そこから 1930 年代の彼の中にもその片鱗を見出そうと視線を動かし、またその観点から評価を行なおうとするならば、当時のコープランドの内実を掘み損なう可能性があると言えるだろう。今日に支配的である視点を批判的にとらえ、それを相対化する歴史的視座とは、もとより、古典文献学者たるニーチェが『悲劇の誕生』において古代ギリシャ悲劇を考察する際に掲げたものであり<sup>74</sup>、後にミシェル・フーコーの『知の考古学』にも受け継がれた視座である。音楽美学の渡辺裕が「勝利者史観」<sup>75</sup>とも呼んで忌避すべきとするこのようなアプローチが不適当なのは、それが、しばしば、今日的な体制を正当化するための政治的歴史を構築してしまうことにある。すなわち冷戦後の国安に顕著なとおり、〈反共主義〉における観点到適わぬ痕跡は見え難くされ、コープランドにおいては、かかる「痕跡」を削除した後の無害なる姿がわれわれに呈示されることにもつながり易い。

20 世紀の合衆国における著名な文化人たちの〈リベラル〉な信条に着目し、冷戦期の〈反共主義〉の影で見え難くされた当時のアメリカの藝術家たちの多様な諸相と拾い上げるための視座がわれわれには必要である。